



復元された名古屋城を観光したことがきっかけでこの物語が生まれました。読んでくださった方の心に何かが残りますように。

愛野史香

第16回角川春樹小説賞 受賞作



商品ページはこちら

大好評発売中!

単行本1,650円(税込)

試し読み版

角川春樹事務所

### 第一章 ポロポロの家宝 二より

京都市左京区にある標高三百一mの低山の斜面に、京楽造形芸術大学——略して楽芸はある。面積が京セラドーム二個分の構内には、十二の学科棟や大学院棟の他、図書館や売店を含む本部棟、食堂、教員や学生、国内のアーティストの作品を展示する美術展示ホール、大学所蔵のコレクションを展示する博物館、現代演劇やダンス、歌舞伎を上演できる劇場が点在する。

真は構内の全施設に足を運んだ経験があるわけではなかった。だが、正門前の大階段だけは、全学生が必ず登る。この季節、名物の大階段には、常盤木落葉の絨毯が敷かれている。

真は今年の三月に休学継続の申請をしにきて以降、一度も構内に足を踏み入れていなかった。これといって他に用がなく、売店に画材を買いに行くこともなかったからだ。

小雨の中、ビニール傘を差して凧太郎と連れ立って歩く。

凧太郎が仕事で大学に来たとなると、文化財保存修復関係だろう。数ある学部学科の一つに、歴史化学や考古学、文化財保存修復・文化財科学を専門的に教える学科がある。東洋書画や古写真、仏像、漆工芸、庭園など、京都の歴史遺産や各種文化財に触れて、修復技術を修得する。「他所の学科に行くの初めてだ。凧太たちと連んではかりだったから、美大の友達がいなくて、邪魔する機会がなかった」

「寂しいねえ。バンドマンってだけでモテるんやから、学科に一人ずつ彼女がおっっておかしゅうないのに、なーんで一人もおらんのか」

「その認識は間違ってる。モテるバンドマンは楽器が弾けるんだ。あいにく俺は、楽器の絵は描

けても、演奏はできない。それに、ここには目が肥えた人間がゴロゴロいて、俺の絵に心を動かされる物好きはいないんだ」

「じゃあ、お前の左目の泣き黒子に心動かされた女の子もいなかったんか？」

「残念ながら、まだ出会えてない。この泣き黒子が人生で役立ったのは一度きり。入試の一次実技で自画像を描いた時だけだ。さながら光明を放つ仏の白毫相のように尊く描いたおかげで合格した」

「そりゃ泣き黒子も職分を全うしてはるなあ」

談笑しながら構内を十分ほど歩いた辺りで、凧太郎が立ち止まって傘を閉じた。足元には、雨に打たれた空木の白い花が疎らに散っている。

煉瓦色の玄関階段の前で真も足を止め、眼前に聳える三階建ての建物を見上げた。

「油画科は白いモダンな建物だけど、ここは、いかにも殺人事件が起こりそうな、レトロな雰囲気のある建物だね。ここが保存修復科？」

「正確には、大学院や。文化財保存修復専攻・保存修復日本画研究室」

文化財保存修復専攻は、保存修復、保存科学、システム保存学の三分野に分かれており、保存修復研究領域はさらに、日本画、油画、彫刻、工芸、建造物の五つに分かれている。

「その名の通り、日本絵画の模写や修復、表具の仕立てをするところなんや。保存修復科でそんなような障壁画の模写は、ここです。僕や叔父さんみたいな人間を育てる場所やね」

真は幼少期に古典模写制作者だった父に連れられて、頻りに寺院や美術館を巡っていた。小学校中学年ぐらゐまでは、父に腕を引かれるがまま同行した。凧太郎が一緒だった時も多々あった。

鑑賞はすべて父の解説付きだったが、幼かった真には難しくつまらなかった。父の声は抑制的で、驚いだ手から父のぬくもりが全身に流れ込んで眠くなった。だが、行けば必ず、真の好きなアイスクリームやハンバーガーを買って食べさせてくれた。それがなよりの楽しみだった。こうして幼少期のおかげで、日本画の知識も、からきし興味がない人間よりはある。

真が父より友人を優先するようになってからも、別段、父との仲は悪くなかった。放任主義の父は寡黙で、真が日本画に関心を寄せずとも一向に頓着しなかった。

もし父が生きて真の現状を目の当たりにしたら、何か言っただろうか。休学費もタダじゃない、と小言の一つは言ったかもしれない。親なのでそのくらいは言っただろう。

だが、車中で凧太郎としたような踏み込んだ言い合いは、あまりした経験がなかった。そも互いを理解し合えていなかったのだから、言い合いに成らない。

父に思いを馳せるとき、決まって悼む気持ちを取るように、父を惨めに思う感情が湧く。

父は、真が物心つく頃に日本画の個人制作をしなくなり、古典絵画の模写や自然科学調査等の日本画研究にのめり込んだ。自分の作品作りはそっちのけで、他人の古い作品にばかり時間を割いた。挙げ句の果てに、大昔の異国の誰かが描いた壁画を見に行つて、土砂に埋もれて亡くなった。遺作があったならまだしも、遺した物は、故人の作品についての研究ばかり。……一生、理解できる気がしない。

「案山子みたいに突っ立ってないで、早う入れ」

不意に、凧太郎と呼ばれて、真は我に返った。心を乱しつつも、建物の中に入る。凧太郎は勝手知ったる研究室の二階に上がり、突き当たりにある一室の扉をノックした。

返事がない。

「約束の時間は間違えてへんはずやけど」

凜太郎が再び叩く。今度はすぐに間延びした男性の声が後方から聞こえた。首を巡らせると、ピンクのハンカチを手にした中年男性が悠然と歩いてくる。

「ごめんごめん、トイレに行っていた。どうぞ、中に入って。鍵は開いているから」

「失礼します」

凜太郎が灰色の扉を押し開ける。

入りしな、真は扉横にある「人見」と書かれたプレートを一瞥した。

「その子が例の助手かい？ よく来たね」

男性が真の顔を上げしげと眺める。口ぶりから素性は知られているようだ。

「真、こちらは人見奎教授。僕の恩師や。現役の日本画家で、大学では、この研究室と日本画科の指導をしておられる。他大の講師や個展もしてはるから、何かと忙しい先生や」

紹介を受け、人見が柔らかに微笑む。

歳の頃は、五十代後半。百八十cmを優に超える細身の長身で手足が長い。短く整えられた黒髪に白髪が数本、交じっている。くっきりとした二重と涙袋に挟まれた眸は黒目がちで、吸い込まれそうに濃く、画壇に立つ者に特有の奔放さと静けさがある。

「初めました。以前、真君のお父さんと一緒に模写事業に携わったことがあります。お父さんのことは、残念でした。傍で人一倍模写に「途な姿勢を拜見して、私は模写の素晴らしさと現代に生まれた幸福に気付かされたのです。本当に惜しい方を亡くしました」

はあ、と怪訝な声が零れた。

（意味が分からない。現代に生まれた幸福？）

文化財や国宝を守るやりがいはあるけれども、模写ばかりして得られる幸福があるとは思えない。現代作家としての知名度がないに等しい父の人生を、真は徒勞に終わらせたことを確信している。

「真君は油画科と聞いていたから関わりはないかと思っていたけど、これも縁だね。協力ありがとう。これから、よろしくお願ひします」

右手を差し出され、真は身を竦めた。人見の太い指先が絵具で汚れている。年中、爪の周りに岩絵具が染み付いていた父の手に、そっくりだ。

「俺は父と違って、模写のことは分かりません。助手として連れて来られましたが、足手纏いになると思います」

拒むように右腕を抱き寄せる。気まずい沈黙が落ちた。

「身構えなくていい。知った上で君の参加を認めた。私は、見苦しくなったものの中からも、綺麗なものが見つかることを、知っています」

教師然とした清かな声が、ささくれた心にすんなり染み入る。視界から人見の右手が消えた。たちまち慚怍たる思いに身を貫かれた。己の中に父の面影を探されて、不快に感じた。それを人見に見抜かれ、己の未熟さを許容された。

「失礼な物言いをして、すみませんでした」

意地を張る所ではないと察知した真は、真摯に頭を下げた。

「立ち話もなんやし、椅子を持ってきます」

4

凜太郎が爪先を扉に向ける。

「待ちなさい。椅子なら、この室のどこかにある」

雑然とした八畳一間の教授室には、デスクと本棚、大量の古画のコピーや画材等が、壁側に寄せて置かれている。

真と凜太郎は室内からパイプ椅子を二脚、探し出して、デスクと向かい合わせに並べた。

デスクチェアに座った人見の背後の壁には、ブラインドが下ろされた窓がある。ブラインドの角度が垂直に調節されているだけでなく、窓硝子との隙間が生じないように、さらに小型のレンガ・ブロックが三段五列に積まれている。外から見上げたときに見える窓も、すべて同じようにブラインドが下りていた。作品を守るために、全館紫外線が一切入らない工夫が施されている。

「真君は、『日本絵画』と『日本画』の違いを知っているかな？」

大学では他科の学生が授業に潜り込んでも、目を瞑る教員は多い。その磊落に質問する様は、人見もその一人だと容易に確信させた。

「そのくらいは知っています。江戸時代が終わるまでの絵画が『日本絵画』で、日本の伝統的な画材と技法を用いて描かれた明治時代以降の近代絵画が『日本画』ですよ」

「その通り。今日は、ある日本絵画の受託研究のために、二人に来てもらいました。——では、日本絵画史上最大の絵師集団は、どうかな？」

「狩野派」

と、即答した。

「あまりに有名だね。日本史の教科書にも載っている」

人見が愉快そうに喉を鳴らす。

「なら、何人か名前を挙げられるよね」

真はすぐに五人の名前を挙げた。

「狩野正信。永徳。山楽。探幽。……芳崖は、日本画家か」

「そうだね。芳崖は家督を継いだ年に幕府が亡びて、狩野派の絵師から明治の画家になった人です。でも、思ったより名前が出たね」

凜太郎が大袈裟に首を振って、感心したように頷く。

そのくらいは出るよ、と内心かなり呆れながら、真は頬を掻いた。

「じゃあ、今挙げてくれた四人の中で、『画壇の家康』と称された人は、誰かな？」

まるで授業のように質問が続く。

「江戸狩野派の祖である探幽です。……まさか、探幽絡みの受託研究ですか!？」

「違うよ。ついでに言うけど、狩野の系図には載っていない絵師です」

「でも、探幽の血縁ですよ。浮き立ちかけた心がすーっと冷めた。今までの流れは何だったんだ……。持ち込んできた方の依頼内容も、ユニークなんです」

いかにも面白くて堪らないといった風に、人見の笑窪の影が濃くなる。久しぶりにわくわくしている人の笑顔を見た。

「対象は、目垢のついていない襖絵です。真君に、その模写制作のお手伝いをしてもらいます」

（続きは書籍で）

6